
魔法先生カズマ!

アルター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生力ズま！

【Nコード】

N0114V

【作者名】

アルター

【あらすじ】

トラツクに轢かれて死んだと思ったら赤ん坊になっていた！？
テンプレの転生をしなかったのでチートをもっていないオリ主は、
ネギの双子の弟として生れた原作知識のないオリ主はこれからどう
いきていくのか！

第一話（前書き）

はじめまして、アルターというものです、この小説が処女作なので、残念な表現や文法がおかしい事などがあつたりするの作品になるとおもいます。

それでもよんでくださるのなら下にお進みください。

第一話

どうも初めまして、僕の名前はカズマ・スプリングフィールドとい
います。

実を言うと僕には前世の記憶があります。そう所謂転生者というや
つです。

でもよくある二次小説のように神様に会ってチート能力をもらった
という経験はしてません。

トラックに轢かれて意識が無くなったと思ったら一瞬後に強烈な光
が届いたので、びっくりして声をあげたら「おぎゃー（ぎゃー）」
といった感じでまともに発音ができなくなって、冷静になって
周りを見てみるとかなり小さくなった自分の手などをみて自分が赤
ちゃんになってしまっているということに気がつきました。

それと双子にようで兄はネギ弟の僕にはカズマという名前が付きま
した、というかネギって名前どこかで聞いたことがあるような気が
する、……ま、いいか！　せっかくの二度目の人生だし楽しも
う。

そこまで考えて思い出したように眠気が襲ってきたのでそのまま眠
ることにした。

三年後、

どうも、カズマです転生してから早三年も経ちました、え？急に時
間が飛んだ？僕もよく分らないんですが二回目意識が戻ったと思っ
たら三年経ってたんですよ、思わず「わけがわからないよ」と某淫
Qベーターのセリフを言ってしまった僕は悪くないと思いました。
とにかくいつの間にか両親はいなくなっていて親戚の家に預けられ
ていたので結構混乱しましたが、いまでは落ち着いたので、家の近
くに住んでいるスタンさんや、親戚のネカネお姉さん、などの人達
に両親がどこに行ったのか聞いてみても父さんであるナギのことし

か言ってくれないので、お母さんの名前を聞いても全員言葉を濁すだけで答えてくれないので、ひとまず保留にしてこれからの事について考えなければならぬ、大人たちの会話を聞いているとどうやら魔法や気といったものがあるらしい、幸い僕たち兄弟は、英雄と呼ばれている父の魔力を受け継いでいて魔力が普通より多いらしいので、よかったと思うこれから、魔法の練習をして行こうと思う。

現在、僕と幼馴染のアーニヤと兄であるネギと一緒に練習用の杖を使つて魔法の練習をしています。

「ようし、<プラクテビギ・ナル火よ灯れ>」ぽっ！

「やった！ちよつとだけど火がでたよ、見てたアーニヤ、カズマ」

「一回で成功するなんてすごいね兄さん！

「む、ネギのくせに成功するなんて、あたしも一回で成功させてやるんだから、みてなさい！>プラクテビギ・ナル火よ灯れ<」

1時間後

「>プラクテビギ・ナル火よ灯れ<」ぽっ！

「や、やつとできた、ネギなんて一回でできたのに」

いやアーニヤもすごいと思う、スタンさんが言つてたけど普通の人が成功するのに3時間はかかると言っていたので、十分才能があるといつていいと思う、ネギが一回で成功したのはチートかよ！つて感じで突っ込みを心の中でしたのは言うまでもない。

「次はカズマの番だね！」

「がんばりなさいよ！」

「じゃいくよー>プラクテビギ・ナル．．っ！」

どうゆうことだ？呪文を唱えようとすると言葉が出なくなる、もう一度やってみよう次もまた言葉が出なくなったらスタンさんに聞きに行ってみよう。

「どうしたの？カズマ」

「いやちよつと噛んだだけだから大丈夫だよ」

「もうちよつとで日が暮れるから早くしなさいよね！」

「ごめんアーニヤ、すぐ始めるから、>プラクテビギ・ナル・・・
つ！<」

「ちよつと！まじめにやりなさいよ」

「カズマどこか調子悪いの？」

「ごめん、兄さんにアーニヤ、喉の調子が悪いから先に帰ってるね」

やっぱり呪文が唱えられない、スタンさんの所に行って相談しよう、あの人ならちゃんと話を聞いてくれるだろう。

第一話（後書き）

こんな駄文をここまで読んでくれてありがとうございます。
これからも、完結めざして頑張って書いていくのでよろしくおねがいします。

第二話（前書き）

どうもアルターです、アイディアがわいたので書きました。
相変わらずの駄文ですが宜しく願います。

PV300越え、ユニーク100越えましたありがとうございます。

第二話

sidカズマ

ネギとアーニヤの二人と別れた後僕は、スタンさんになぜ呪文を唱えることができないのかを相談するためにスタンさんの家に来ていた。

「スタンさん、ついさっきまで僕とネギとアーニヤで魔法の練習をしてたんですけど、ネギとアーニヤの二人は呪文をちゃんと唱えれたのに僕が呪文を唱えようとすると言葉が出なかつたんです、このことについて知っていることがあつたら教えてください。」

「なるほど、呪文が唱えられんか．．．実際見てみるとよく分らんから一回やってみてくれんか？」

「分かりました、じゃあやりますよ>プラクテビギ・ナル．．．っく」

やっぱり呪文を唱えようとすると何かに邪魔をされたような感じになつて言葉が出なくなる、スタンさんは、このことについて知っているのだろうか。

「スタンさん、なんで呪文が唱えられないのかわかりましたか？」

「カズマよ落ち着いて聞くのじゃ、お主は．．．魔法が使えん」

「え？嘘ですよねスタンさん、嘘だつて言つてくださいよ」

「事実じゃよカズマ、おぬしのその呪文が唱えられんというのは生まれつきの体質なのじゃよ、じゃが魔法が使えなくとも身体能力強化だけで戦うすごい使い手もおるのじゃからカズマがそのようなものたちのようになりたいというのならわしが身体能力強化を教えてやろうと思う、どうじゃやるかカズマ？」

スタンさんは僕が魔法が使えないとことでネギとアーニヤの二人と

仲が悪くなると思って、魔法が使えなくてもすごい人たちがいることを教えてくれて、しかも能力強化の方法を教えてくれるの比如说、僕たち三人の仲が悪くならないように、それなら僕にできることは、スタンさんに教えを請うことだと思う、実際そんなすごい人達みたいになりたいという願望もあるしね。

「はい、よろしく願います!」

「うむ、いい返事じゃなじゃが条件がある」

「条件?」

「能力強化にかまけて、ネギとアーニヤの二人と仲が悪くなったら教えるのは無しじゃからな」

「大丈夫ですよ、ちゃんといつもどおり遊んだ後に教えてもらいに来ますから」

「よし、そういうことなら早速明日の夕方から始めようかの」

「はい!」

スタンさんとの話が終わって家に帰るともう暗くなっていたので心配したネカネ姉さんが抱きついてきたり、ネギが泣いてたり、アーニヤに「心配かけんじゃないわよ、このばか」と言われて殴られたりしたけど、とても心配してくれていたことが伝わってきたのでかなり嬉しかった。

第二話（後書き）

主人公がタカミチと同じで呪文詠唱ができない体質ということが判明しましたね、これから物語は加速します（キンクリ的な意味で）、次回は一年飛んで悪魔の襲撃あたりまで進みたいと思います。

第三話（前書き）

今回は、カズマの初戦闘がありますが正直戦闘描写が難しくひどい出来になってると思います。

3000字を超えてしまっているので、内容がひどい事になってい
ると思いますがそれでもいいという方だけお進みください。

第三話

一年後

sidカズマ

どうもカズマです、あの魔法が使えないとわかった日から早くも一年経ちました。

あれからあったことと言えば、身体能力強化についてスタンさんに教えてもらっていた僕には、魔法が使えない代わりにといった感じで能力強化の才能が高かったみたいでスタンさんが驚いていました。

それとスタンさんに能力強化の究極技法にあたる咸卦法と言うものがあるということを教えてもらいました、咸卦法というのは相反しあう性質の「気」と「魔力」を融合させ身の内と外に纏って強大な力を得る事のできる技法らしいです、魔法が使えなくても強い人たちは全員ではないけど何人かはこの咸卦法を使えるらしいです、まあ習得するのが困難で才能がある人でも数年かかると言っていたので、これから少しずつ練習していつかは使えるようになりたいです。

それはまず置いておいて、半年前ぐらいに自分の家の近くには小さい森があつてそこで僕と兄さんのネギと二人で魔法と能力強化の練習をしていて僕が先に帰ってから夕食の準備をしていると、少しして兄さんが帰ってきてカモというオコジョ妖精を助けたと言ったので「兄さんはやさしいね」というと「そんなことないよ」といつて恥ずかしがっていた、だいたいここまでがこの一年であつたことです。

「それで現在していることは、いつもの三人組で遊んだ後にアーニ

「ヤの家にお邪魔して、夕飯をごちそうになっている、と」

「カズマ誰に向かってしゃべってるの？」

「いやなんでもないよ兄さん」

「さ、夕飯ができたよあんたたち」

「いつもすみません、ココロウアおばさん」

僕たち兄弟がなぜアーニヤの家にお邪魔して夕飯をごちそうしてもらっているのかと言うと、ネカネ姉さんが学校に行っていて、月に一回しか戻ってこれないのでその間は僕と兄さんの二人しか家にいないのでココロウアおばさんが面倒をみてくれると言ってくれたのでお言葉に甘えさせてもらっているのだ、さすがに朝、昼、晩とお世話になるわけにはいかなかったので、朝と昼は僕と兄さんで用意して晩御飯の時だけはごちそうになっているのである。

「そんなこと気にせず、三食とも家で食べていいっていつも言うてるのに」

「そうよ、ネカネさんが帰ってきた時も家で食べてきてくれていいのに」

「え、いいの？じゃ今度からそうしようよカズマ」

正直その提案はかなり嬉しいんだけど、子供二人とはいえ一か月も三食お世話になったら食費がかなり掛かるだろうということは分り切っていることなので、一食だけでも負担が少くないのでこれ以上迷惑をかけたくないので。

「いや、兄さんこれ以上迷惑はかけられないよ」

「やっぱりだめだね」

「二人ともまだ子供なんだからそんなこと気にしないでいいのに」

こんなやりとりをしながらもこれから変わらない日々が続いてい

くと思っっていたんだ。

けどある日から兄さんが急におかしな行動をとりだしたんだ、たしかあれは少し前にネカネ姉さんが帰ってきていた日だったと思う、その日に姉さんが僕たちの父であるナギについて教えてくれたんだ、ナギはピンチになったら助けてくれるスーパーマンのような人だと言っていたので以前から父であるナギに会いたいと言っていたネギはそれをまにうけて自分から木の上から落ちてみたり冬の川に飛び込んだりしたのだと思う、僕からしてみればもう父であるナギは死んだということはスタンさんにきいていたので、自分を追い詰めてピンチになってお前はピンチクラッシャーでも呼ぶつもりかよ！とか思ったりしたので、そんなことをしても意味がないよということを兄さんに言おうとおもって兄さんの所に行きました。

「兄さん、兄さんが無茶をしてピンチになってもお父さんは死んでるんだからもう会えないんだよ」

「そんなことないよ！今までののはお父さんが来るほどのピンチじゃなかったただけなんだよ、それに無茶をしてもみんなお父さんになるってほめてくれるんだよ」

父さんは死んだとスタンさんに言っていたし、その時の顔がどこかが悲しそうだったので嘘ではないと思うし、嘘をいうような人じゃないことはつい最近までスタンさんの所に能力強化を教えにもらいに行っていたので分っているつもりだからどうかして兄さんを説得できないか考えて出した答えは。

「兄さんが、無茶をやめてもうちょっと年齢が上がったら僕がいっしょお父さんがしてあげるから」

「ほんと、いっしょにさがしてくれるのカズマ」

「ないなら見つけてやる！なくても見つけたす！、だからあとちょっとまってよ兄さん」

一緒に探すことを約束をしたので兄さんも無茶するのはやめると言って約束してくれたのでよかったよよかった、そういえば今日ネカネ姉さんが帰ってくる日だったな、兄さんと一緒に帰ろう。

「兄さん、今日ネカネ姉さんが帰って来る日だよ早く帰ろう」

「そうだねカズマ行こう」

村に僕たち兄弟が着いた時には、村全部が燃えていた「え？」僕と兄さんのつぶやきがシンクロしていた、どうゆうことだ兄さんのを説得しに行く前はこんなことにはなってなかったのに、しばらく兄さんと一緒に進んでいると村の人たちが石になっていた杖などを持っているということは．．．そこまで考えて近くに兄さんがいないことに気が付いた、まず僕はスタンさんにお墨付きをもらった強化を使って兄さんを探しに行くことにした。

「にーさーん！」

「ケケケ見ツケケタゾ、サウザンドマスターノ子供ダ」

「ひっ」

「怨ムナラ親ヲ怨ムノダナ>永久石化<」

僕は初めて見る悪魔という存在に恐怖していた、スタンさんから話で聞いたものや本で見えていたものよりも何倍も怖い、多分殺気というものをあてられているのだと思う、実際さつきから嫌な汗がでくるし足がすくんで全然言う事を聞いてくれない、二回目の人生はかなり短かったなと思って目を閉じたら「あぶない！」どんっ！コロナおばさんの声が聞こえたと思ったら次の瞬間僕は強い衝撃を受けて目を開けたそこには体の半分が石になったコロナおばさんがいた。

「ココロウアおばさんどうして」

「子供を守るのは大人の役目だからね」

「アーニヤはどうするんですか、ココロウアおばさんが石になったらアーニヤが一人になってしまうのに

どうして、僕なんてかばって」

「アーニヤにはあんたたち兄弟がいてくれるからそこまで心配してないよ、それにねカズマとネギもわたしにとっちゃ息子見たいな．．．もんだっ．．．よ、カ．．．ズ．．．マ自．．．分を責め．．．ない．．．で」

この言葉を最後にココロウアおばさんは完全に石になってしまった。

「ココロウアおばさん！うわああああん」

「フン無駄ナコトヲ、今度コソキサマノバンダ」

「．．．が欲しい、力がほしい！ココロウアおばさんや村の皆を石にしたこいつらを倒す力が！」

（二度目の人生でこれほど力が欲しいと思ったことはないよ、魔法や気といった類のものがあってそうゆうのを使えるようになって強くなってみたい、とは思っていたかもしれないけど多分遊び感覚だったんだ村の大人たちの言う英雄を夢見ているだけで本当に力が欲しいと思っでなかつたんだ、だけど！今は違う！オレの平和を壊したこいつらを倒せる力が！）ここまで思っでまわりの建物が原子分解してオレの右腕に集まっで再構成されて装甲になり、髪の毛がさかだち背中には赤い三枚羽根が生えていた。

「（サ、サウザンドマスターが）ナングト早スギルセメテコノガキダ．．．ケ、ナ．ナングソノ腕ハ」

「お前ら倒すために手に入れた、オレのオレだけの力だ！」

変わった右腕は、前世で好きだったアニメの主人公のものと同じだとわかったので、使い方は問題ないので、まずは目の前のこいつから倒す！羽根を一枚使って一気に加速し技の名前を叫ぶ

「衝撃のファーストブリットオオオ！」

加速に逆らわずに目の前いる悪魔に突っ込んでいく、

「悪魔パンチ」

真正面から悪魔の拳が向かってくるが、そんなこと関係ねえ！

真っ向勝負で碎いてやる！

「うおおおおお！碎けるお！」

ドガン！

オレの拳が真っ向からきた悪魔の腕を粉碎した

「バカナ、私ノ腕ガアア」

このままおわらせてやる！二枚目の羽根が碎けると同時に一枚目の時より早くなった加速で悪魔にむかう

「撃滅のセカンドブリットオオ！」

ニヤリと悪魔が笑った

「カカツタナ>永久石化く」

あいつは勝ったと思ってるだろうが、オレは負ける気がしねえ！

石化の領域に向かって右腕を振りぬく

「うおらぁ！」

肩口当りの服は石化したけど体は石化してねえな、読み道理だこのまま振りぬいた拳をやつに叩きつける

ズガン！

という音がして体の半分が消滅した悪魔がオレを驚愕の表情で見ている

「マジックキャンセラーダトマサカ、「ごちゃごちゃうるせーんだよ、どうせ次の一撃でお前は終わりだ」

三枚め羽根が碎ける

シュン！

とした音が聞こえた瞬間俺は悪魔の前に来ていた
「抹殺の「マ、マテ」ラストブリットオオオ！」
ドガン！

悪魔が完全に消滅した後すぐに右腕をの装甲が解除されたら、全身に激痛が走ったアドレナリンが切れたのと無茶なことをしたからだ
と思う、そこまで考えて僕の意識は途絶えた。

第三話（後書き）

ここまで見てくださった方ありがとうございます。

やっとオリ主の能力が出ました、詳しい事については、次にキャラクター設定を書く予定なのでそちらで確認してください。

キャラ設定その巻（前書き）

どうもアルターです、P V 4 0 0 0 ・ユニーク1 0 0 0 0 達成しました。

これもこの小説を見てくださっている皆様のおかげです、これを励みにしてこれからも精一杯頑張っていきたいと思います、これからもこの小説をよろしく願います。

今回は主人公のキャラ紹介です。

キャラ設定その壱

主人公：カズマ・スプリングフィールド 10歳

能力：アルターシエルブリット、マジックキャンセラー（シエルブリット装着時）

武器：シエルブリット、素手

身長：ネギより少し高い

体重：ネギと同じ

身体能力：右腕はアルター化しているのでただのストレートでコンクリート破壊可能、それ以外の能力は男子高校生並み。

技：瞬動・身体能力強化（魔力と気の両方可能）・感卦法（未完成）

必殺技：衝撃のファーストブリット、撃滅のセカンドブリット、抹殺のラストブリット

好きなもの：家族・友人・か甘いもの・戦い

嫌いなもの：苦いもの全般・他人を見下すやつ・悪魔

戦闘スタイル：基本はシエルブリットを展開して、魔力と気の身体能力強化を使い分けることで息切れを起こさないようにしたて、チヤンスが来たら必殺を三発叩き込むスタイルで、短期決戦型は未完成の感卦法を使つて火力・耐久・速度を上げて、一気に敵に近ずき必

殺をきめるスタイル。

補足：カズマは悪魔の襲撃時にシエルブリットを使った代償で右手の甲に欠損が生じてしまったので、普段は指の部分がない黒のグローブ（万が一見られた時のために認識阻害の魔法が働いて、火傷をしているように見える）をしています。

カズマはシエルブリットを展開する時に、右腕を左手でつかんで右手の人差し指を曲げてから中指を曲げと、順番に小指まで曲げて終えてから拳が軋むほど握る。（いつもではない）

一人称は基本僕だが、戦闘が始まるか怒ったりすると一人称がオレになり乱暴な言葉使いになったり熱い事（テンションが上がって前世好きだったアニメのセリフなど）を言ったりする。

シエルブリット展開時にマジックキャンセラーが発動するのは、アルターの発動と同時に体に眠っている能力を無意識に無理やり引き出しているから。

キャラ設定その壱（後書き）

今回は主人公のキャラ紹介でした、これからはオリキャラを出したらその出した話の後にオリキャラの設定を載せようと思います。

ここから下はおまけです

カズマの原作介入時の必殺技の威力

衝撃のファーストブリット〓修学旅行編のネギの雷の暴風

撃滅のセカンドブリット〓学園祭編の超の燃える天空

抹殺のラストブリット〓ネギの初期の千の雷

第四話（前書き）

どもつもアルターです。

今回も話の内容がぐだぐだになってしまいました、それでも読んでくれるのなら進んでください。

次の投稿は何日か開くと思うのでご了承ください

第四話

sidカズマ

あれ？僕はあの悪魔を倒した後どうなって．．．そうだそのまま意識を失ったんだった、そういえば村はどうなったんだこまで考えてゆっくりと意識が覚醒した。

「知らない天井だ」

（いやネタを言っている場合じゃない）、（ていうか体が痛い全身筋肉痛になったみたいだ）、（てかここはどこだろう？）という感じで混乱しているとふいに声をかけられた。

「カ、カズマ」

「あ、ネカネ姉さん」

「よかった、目が覚めたのね、あの悪魔が来た日から2週間も目が覚めなかったから私もネギもアーニヤちゃんも心配してたのよ、そうだネギとアーニヤちゃん呼んでくるからおとなしくしてるのよ」

2週間も意識が戻ってなかったのか、かなり心配をかけってしまったようだしネギとアーニヤが来たらちゃんと謝ろう。

「カズマっ！よかった目が覚めたんだね」

「カズマ！目を覚ますんならもっと早く目を覚まさないよ、心配しちゃったじゃない」

「ネカネ姉さん、兄さん、アーニヤ、心配掛けてしまっでごめんなさい！」

この後三人に許してもらってから、兄さんがそうだ！といって少し

興奮気味に話しかけてきた。

「僕ね、お父さんに助けてもらったんだその証拠にほら、この杖をもらったんだそれとね、この指輪はカズマに渡してくれてはいこれ」

「ありがと、兄さんちよつとつけてみるね」

！？驚いた、指輪をつけるまで痛かった体がもう楽になっているこの指輪には回復の効果があるらしい、ていうかこの効果ってDQの祈りの指輪みたいだな、まあ気にしてもしょうがない

「そっか兄さんは父さんに助けてもらったんだ、父さんに会えたから一緒に探すって約束は意味無くなったね」

「まだ意味あるよ、お父さん僕に杖をくれた後どこか行っちゃたんだ、だから今度は僕たち兄弟そろってお父さんに会おうよ、ね？カズマ」

「うん、兄さん」

（それから6年後）

sidカズマ

どうもカズマです、この6年はいろいろなことがありましたまず、ネカネ姉さんにスタンさんがネギをかばって石になったこと聞いてとても悲しくて泣いたこと、

ココロアおばさんが僕をかばって石になってしまったことをアーニヤに伝えて泣かれたあと、数日は無視されたりしていたのでそれに見かねた姉さんを交えた僕とアーニヤがお互いに謝って仲直りしたこと

僕たち兄弟が魔法学校に入学したこと、入学してからしばらくして日本から父の知り合いであり僕と同じで生まれつき呪文詠唱ができない体質のタカミチ（友達だからこう呼んでほしいと言われたので）

と知り合ったこと

今更だけどシエルブリットを使った僕は右手の甲に欠損が生じているので普段は認識障害つきの指なしグローブをつけている、（シエルブリットは何回か使って制御があるていどできるようになっている）スクライドのカズマさんがやっている発動方法が今のところ一番装甲の展開が早い事が分ったり

感卦法の練習をしたり、ネギの魔法の練習に付き合ったりと本当にいろいろなことがありました、そして今から始まるのは卒業式です。

第四話（後書き）

今回も最後まで読んでくれてありがとうございます。

前書きでも書きましたがリアルのほうが忙しくなりそうなので次の話まで間が空くと思います。

それでは、これからこの小説をよろしくおねがいします。

第五話（前書き）

遅くなつてすみませんでした。

用事のほつがひと段落ついたので執筆再開したいと思います。
相変わらずの駄文・亀更新ですが宜しく願ひします。

それとあらすじかえました。

第五話

sideカズマ

どうも、今から魔法学校を卒業するカズマです。

ついさっきやっと長い、なっつつつつがい校長の話が終わったので
やっと卒業証書の授与になりました。

にしても、前世でも思ってたけどなんで校長の話は無駄に長いんだ
ろうか？ 卒業式なのに危うく寝るところだったよ、まあ少し寝て
しまつて隣に座ってたネギに起こしてもらったんだけど。

「ネギ・スプリングフィールド君！」

「はい！」

お、もうネギの番か次が僕の番か

「カズマ・スプリングフィールド君！」

「はい！」

この後特に問題なく卒業式が終わりました、今はネギと一緒に卒業
証書に修業地が浮かび上がるのを待っているとネカネ姉さんとアー
ニヤが声を掛けてきた。

「ネギ、カズマ なんて書いてあった？ 私はロンドンで占い師よ」

「修業の地はどこだったの？」

「「今浮かび上がるところ（だよ）」」

話しているうちに卒業証書に修業地が浮かび上がっていた、えーと
なにになに

「「日本で……先生をやること」」
「「「え〜〜〜〜〜〜〜〜！？」」」

いやいやおかしいだろ！十歳に教師をさせるとか労働基準法違反つてレベルじゃねーよ、確かに僕とネギはもう大学レベルの頭脳を持つてるから教えるのは問題ないと思うけどさ……とりあえず校長にどういふことが聞きに行こう。

「こ、校長 先生つてどうゆうことですか！？ 何かの間違いではないのですか？十歳で先生など無理です」

「ついボケたんですか校長？」

「カズマさらつと毒を吐くのはやめてくれんかのう とにかく卒業証書にそう書いているのならきまつたことじゃ、立派な魔法使いになるためには頑張つて修業してくるしかないのう」

「何か裏でもあるんじゃないんですか？」

考えてみればおかしい事ばかりなんだよな、わざわざ英雄の息子である僕たち兄弟が同じ修業地ということがすでおかしい、偶然にしてはできすぎている何か作威的なものを感じるんだよな

「（相変わらずするどいの）安心せい修業先の学園長はわしの友人じゃからの、ま がんばりなさい」

「はい わかりました！」

「むう 一様納得しときます」

そして時間がすぎるのは早いもので僕とネギが日本に修業に行く前日になっていた、この間にあった事と言えば、日本で教師をするにあたって日本語を覚えなきゃいけないんだけど、僕は前世が日本人だったので日本語を覚える必要がないけどネギはそうはいかないの

で日本語の勉強をしていたりしていた、そういえば今日校長に呼ばれてるんだった行ってみよう。

「失礼します、カズマです」

「入っとくれ、今日呼んだのは他でもないお主の右腕の事じゃ」

「まあ予想はできてましたよ、それでその話の内容は右腕に装甲を展開して力を使うとだんだんと右腕から人間のものではなくなっているということですか？」

「カズマ、分っておったのか！？」

「自分の体の事ですよ、そんなこといやでも分りますって ついでに寿命がかなりちよつとずつ減っていつているのもね」

「そこまで分っておるのならわしがこれからなにを言うか予想できておるな」

「はい、もうこの力を使うなっでことですよね？」

「その通り、わざわざ自分の寿命を削ることもあるまいて」

「いや無理です、僕はあの六年前の火事の日に自分で望んでこの力手にいれました それにネギと約束した親父探しの時に破らなければならぬ壁が立ちふさがると思っんですその壁を破るためなら僕は迷わずこの力を使う、必ずです。」

ここまで言っで僕は校長の言葉を待っていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

長い沈黙の後に校長が言った事は全くの予想外な言葉だった。

「そうか・・・そこまで言うのなら止めはせんよ、じゃがこれだけは守ってほしい・・・寿命以外で死ななとつてくれ」

この時僕はその言葉が予想外すぎてポカーンとしてしまっていた

「どうした？そんなにポカーンとして」

「ははっ、寿命以外で死ぬなっで僕は初めから寿命以外で死ぬ気なんてありません、大丈夫ですよ」

「そうか、それならこの話はこれまでじゃ帰ってよいぞ」

「それでは失礼します！」

そして出発日当日

「カズマ ネギ、忘れ物はない？向こうに着いたら手紙を送るからねちゃんと返事頂戴ね？」

「うん、大丈夫だよお姉ちゃん こっちからも手紙書くから」

姉さんは心配性だな僕もネギも大丈夫だから」

「じゃあ行ってきます！」

「うん、行つてらっしゃい！」

こうして僕とネギは日本に旅立ったこれから始まる生活を思い描きながら。

第五話（後書き）

次回からやつと原作に入れます、他の転生者も出す予定です。

それと吸血鬼編までに起こったイベントに関しては、就任当日と惚れ薬事件、図書館等以外は飛ばすかダイジェストで書いていくと思うのでご了承ください。

授業の描写に関しては、作者の知識と文才が乏しいので、詳しく書いたりすると力オスなことになったので「今日の授業は〜〜〜があった」ぐらいにしか書かないとおもいます。

次の投稿は、1〜2日後になると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0114v/>

魔法先生カズマ!

2011年7月25日13時31分発行